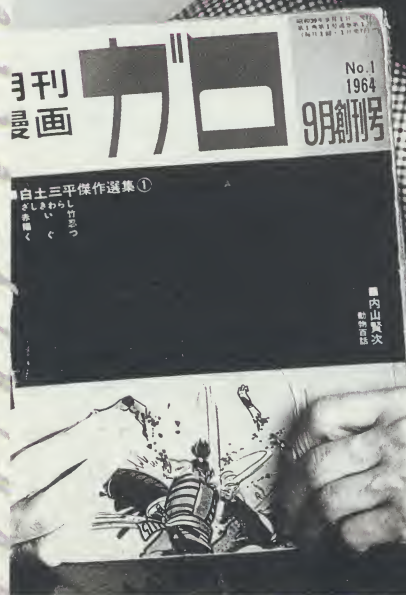
月刊
漫画
ガロ
680yen
1964年11月10日
第3種郵便物認可
1966年4月5日
国鉄首都特別扱承認雑誌2343号
1996年・4月1日発行
第33巻・第4号
通巻374号
（毎月1日発行）
1996
april
4
GARO
publicazione stravagante fumetto rivista
追悼②
【ガロ】・初代編集長
長井勝一
月刊
漫画
ガロ
No.1
1964
9月創刊号
白土三平傑作選集①
内山賢次
動物百話

表紙 "遺影" 写真撮影・荒木経惟

長井勝一氏を偲ぶ会

〈２月13日〉

発起人

赤瀬川原平
上野昂志
勝又　進
高　信太郎
呉　智英
佐々木マキ
永島慎二
林　静一
松田哲夫
水木しげる
南　伸坊
矢口高雄
山中　潤
渡辺和博

左から：香田明子・松田哲夫・南伸坊・上野昂志・赤瀬川原平・水木しげる
矢口高雄・永島慎二・勝又進・呉智英・荒木経惟・渡辺和博の各氏

発起人代表挨拶

南　伸坊氏

永島慎二氏

献杯の挨拶・水木しげる氏

林　静一氏

香田明子夫人

司会進行役・高信太郎氏

上野昂志・水木しげる・矢口高雄の各氏

追悼・長井勝一②

カットは2月13日、
「長井勝一氏を偲ぶ会」の寄書きより

「長井勝一氏を偲ぶ会」

二月十三日 於・アルカディア市ヶ谷

去る二月十三日、午後五時より行われた「長井勝一氏を偲ぶ会」には、約六百名というたくさんの方々にご参列いただき、しめやかに、そして賑やかに、それぞれの方々がそれぞれの思いをこめて、長井さんとの別れを告げました。

しめっぽいことが嫌いで、賑やかなことが好きだった長井さんらしい偲ぶ会となり、多くの方が、二次会、三次会へと足を運んでくださり、長井さんが大好きだったお酒を飲みながら、たくさんの思い出を語り合うことができました。

ご参列いただきました皆様、また、別の場所から思いをよせていただきました関係者愛読者の皆様、ありがとうございました。

発起人代表挨拶

南 伸坊

お正月の5日に長井さんは肺炎で亡くなりました。阿佐ヶ谷の自宅でコッソリとアッサリと死んでしまいました。お葬式はごく内輪の少人数で1月7日に終わっています。長井さんは儀式やアイサツが苦手で、そういうことはサッサと終わらす流儀でした。

私は昔よく長井さんに口答えをするナマイキな社員でしたが、今でもあんまり変わってないかもしれません。

長井さん、お葬式というのはまだ生きている人間のためにあるんです。人間はいつか必ず死んでしまう。忘れているそのことを思い出すために、突然で理不尽な別れのつらさを何とかするために、お葬式というのはまだ生きている人間のためにあるんです。それで私たちはこの会を開きました。

明日はバレンタインデーです。女のコが好きな男のコをチョコでナンパする日です。しかし義理のチョコもかなり出回ります。お葬式にもフツウは義理の参列というものがあります。人間だからそれがフツウです。しかし、確実に言えるのは、今日この会場に義理でこられた人はいません。ひとり残らず長井さんを好きだったから来て下さった人ばっかりです。なぜなら、来なくたって一銭も損しないし、来たからって一銭も得しません。

私が思うのには、これが貧乏の気持ちいいところです。長井さんと私たちのつながりのいいところだと思います。

長井さん、アイサツはもうおしまいです。やすらかに眠って下さい。

別れを惜しむ方々の列がゆっくりと進みだすと、祭壇には、次々と白いカーネーションが捧げられ、静かに合掌する姿がいつまでも絶えず、生前の長井さんの人付き合いの深さが偲ばれた。

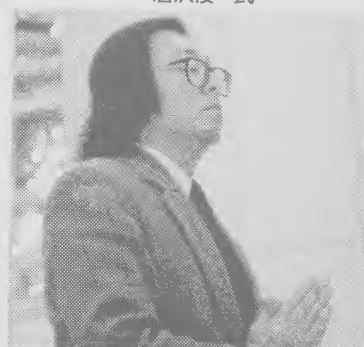
発起人及び株主より献花

平口広美氏

村野守美氏

山野一氏

泉晴紀氏

唐沢俊一氏

友部正人氏

東陽片岡氏

高取英氏

献杯

「追悼号がこんなに早く出るとは思いませんでした。これもきっと皆が長井さんに協力したからだと思います」と、しみじみと挨拶される、赤瀬川原平氏

「こういう新式のお葬式があることを今日始めて知り、感心しています」とビックリされる水木しげる氏

この日のために、わざわざ京都から駆けつけて下さった佐々木マキ氏

「長井さんには妙な色気があった」と語る遺影を撮影された天才・荒木経惟氏

とうじ魔とうじ氏

杉作Ｊ太郎氏

井口真吾氏

※ここにご紹介しました他にも、たくさんの作家・関係者の方々にお集まりいただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

矢口高雄氏

林静一氏

歴代編集長 渡辺和博・南伸坊の両氏

青林堂の監査役でもある勝又進氏

女性作家代表で挨拶されるやまだ紫氏

呉智英（右）と、そして鈴木邦夫の両氏

歓談が続く水木しげる・末井昭・南伸坊の各氏

参列者の皆様

尾崎秀樹氏

久住昌之・サエキけんぞうの両氏

写真提供：森川 潔（北海道新聞社）

敗戦翌日の光景

長井勝一

昭和二十年八月十五日、暑い日の昼、塩釜にも玉音放送があった。ラジオが古く、よく聴き取れなかったが、戦争が終った事だけはわかった。私は職業上の関係で、ついに来るものが来たかと思った。遠からず敗れるであろうとは薄々わかっていた。この日を境に敗戦国日本は地獄の底に落ち転げて行くのか、明日からの日本人はどうなるのだろうか、まず東京はどうなるのか、この歴史的瞬間を見逃してたまるものかと、好奇心だけが先走り、分別の無い年頃であった私は、取るものもとりあえず二時間後、仙台発上野行に乗り込んでいた。いつもならなかなか切符も買えず、乗っても超満員の汽車が、この時は嘘の様にがらあきだった。東京に着くと早速千住の先に住んでいた姉夫婦の所に行った。夜も遅くなのに、近所に住む親戚たちも集まり、みな沈痛な面持ちだった。戦争に負けたくやしさ悲しさ、そしてこの先どうなるかが不安で寝るどころではなかったのだ。私は「なるようにしかならないんだから心配してもしようがない、今の所は寝るのが一番」とみなを元気付けた。翌日いやがる義兄を説き伏せて自転車でとにかく東京中を見て廻る事にした。

千住大橋を渡り、三ノ輪、下谷、上野、神田、町中のところどころは結構焼け残っていたが、どの町もシーンと静まり返り殆ど人は歩いていない。駿河台下から焼け残った気象台の横を抜けて宮城前に行った。あれで二、三百人位の人が居ただろうか、みな正座して玉砂利の上に両手を揃え頭を深く垂れ嗚咽している。私は茫然として立ちつくした。突然竹橋の方から戦闘機が轟音をたて超低空で頭上を飛び越え、日比谷の方向に消えて行った。足もとにビラが落ちており、「厚木航空隊は絶対に降伏しない」というような文面が書かれていた。

私は宮城を後に銀座、日本橋を廻って見た。大きなビルだけは残っていたが、惨憺たるものだった。蔵前の大通りから雷門に出た。途中はみごとな焼け野原だった。仁王門前から観音様を望むと仲見世通りの石畳の両側には仲店がずうっと焼け崩れもせず建ち並んでいる。その先に観音様のお堂も焼け残っているのが見えた。

お堂の近くに四、五十人の人達がいて何やら動き廻っているので自転車を引いて行って見た。両側の仲店は何にもなく、勿論だあれもいない。ただガランとした外側だけの仲店が延々と続いていた。人がいる所に行って見ると、驚いたことにその焼け残りの中で何かわずかばかりのものを売っている人たちがいるのだ。敗戦の翌日である。

髪油を売っていた人のよさそうなおじさんに、誰でもここで商売が出来るのかとたずねると、芝山組という露店商の親分に話をすれば誰でも出来るとの事だった。

早速翌日から私は、このだれもいない仲店の一角で、雪の降る十二月まで、古本の商売をさせてもらった。その頃には観音様の周り一帯は大ヤミ市となっていた。

初出「東京人」88年秋季号

●検証・貸本時代の長井勝一

昭和20年、終戦直後、浅草の露店でぶつ切りマンガを売ることから長井勝一のマンガ人生は始まった。店に出したマンガ本があっという間に売れてしまうのを目の当たりにし、昭和23年、「足立文庫」を設立。マンガの出版を始める。足立文庫から単行本を出したマンガ家には石井清美（後に刺青師・凡天太郎として有名になった）や、伊藤章夫（「少年マガジン」の初期に「もん吉くん」などを連載）などがいたという。B6判横びらき64頁、部数は各3万部（！）。20点ほどの単行本を出版したというが、この頃の単行本を今目にすることは難しい。

順調に行くように見えた足立文庫だったが、23年の暮れには長井さんは喀血。結核であった。高価なストマイを何本も打ったが、不摂生がたたり、結局昭和25年暮れに入院（ただし、足立文庫はその後の日本漫画社設立後も取次店として営業はしていた）。

昭和29年に退院したのち、31年に「日本漫画社」を興し、再びマンガの出版へ。始めは足立文庫時代の作家である石井清美なども単行本を描いていたが、昭和32年、「こがらし剣士」（巴出版）でデビューした白土三平と運命的に出会う。「ガロ」の先月号には、日本漫画社時代の出版物リストが掲載されたが、90点余りの単行本を出版したようだ。ちなみにこれは日本漫画社及びその後の三洋社を通じて言えることだが、単行本の奥付にある発行人の名前は、編集担当の名前を使う場合が多かった。確認したところ、3月号に載っている服取五郎、高杉伝三郎は当時の日本漫画社の社員だったという。

しかし、日本漫画社も結局昭和33年夏にはやめてしまう。浅草でバーを始めるためだったが、こちらは一年足らずで失敗。昭和34年の9月、小出英男、夜久勉の二人がスポンサーとなり、三洋社を設立。再び出版業を始める。

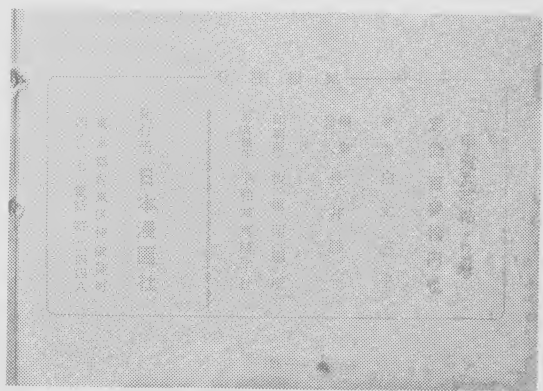
白土氏は、日本漫画社がなくなってから東邦漫画出版で作品を描いていたが、構想のあった「影丸伝」（「忍者武芸帳」は長井さんがつけたタイトルで、元々はこのタイトルだった）が三洋社からその年の暮れに出版される。

「忍者武芸帳」第一巻はA5判256頁と、頁数は普通の貸本向け単行本の2倍、しかも定価は普通の本と同じ150円だった。結果はご存じの通り、貸本史上空前のヒットとなった。

昭和35年、水木しげる氏の「鬼太郎夜話」もヒット。勢いにのる三洋社を取材した「全国貸本新聞」の記事があるので、全文収録する。

▲日本漫画社では少女マンガも多数発行している。お涙頂戴のいわゆる「母モノ」が多い。

▲日本漫画社からの白土三平第一作「甲賀武芸帳」。

▼「甲賀武芸帳」第二巻奥付。

漫画社訪問記

三洋社といってもピンと来ないかも知れないが、忍者武芸帳のと言えばあとは言わずもがなだ。少し大げさにいえば、このところ漫画界は一寸した三洋社旋風だ。その三洋社を八月三十日、やはり田中、高橋、篠田、広瀬のメンバーが神田三崎町の本社に訪ねた。曙出版社から程遠からぬところである。新興出版社にふさわしい新しいビルの一室に社員五、六名が忙しく働いている。社長は小出英男氏、専務は長井勝一氏、ともに上野の取次店の社長さんだ。

まず、長井さんが白土三平を見出したことから聞こう。本誌前号に紹介した「アサヒ芸能」はこう記している。「紙芝居の絵を描いていた白土氏は、ある漫画家にすすめられ漫画の単行本を描きはじめたが、なかなかその原稿を買ってくれる出版社がなかった。これを見出したのが長井氏だ。〝あなたの好きなものを描いてみなさい。生活は私が何とかしてあげよう〟白土三平というペンネームも、ただなんとなく長井氏とこの無名の画家岡本氏が考えてつけた」

日本漫画社の名で出版された「甲賀武芸帖シリーズ」少女もの「からすの子」（いずれもB判）を記憶している業者も多いであろう。白土三平の処女作はこうしてデビューした。その後日本漫画社は解散、「忍者旋風」が東邦漫画社から出版され、今年の一月長井氏らの三洋社創立とともに「忍者武芸帳」が出た。

白土三平の作品自身についてはもはやここで記すまでもないことであろう。三洋社では現在二十五名の画家を擁している。石川フミヤス、佐藤まさあき、辰巳ヨシヒロ、影丸譲也、コンタロー、永島慎二、山森ススム、等々と云った一流メンバーである。石川フミヤスはアクション・ロマンスといったムードの作家だ。新進の影丸譲也は、推理小説で言えば、大藪春彦の非情を描く。これらの作家の他にも、長井さんが最も力を入れているのは新人の養成だ。そのために三洋賞が設けられている。第一回三洋賞の当選者は「黒い影別冊」に掲載された「白い花」「呼子」の前川浩康さんだ。作品は一見渋すぎるが、わずか十二頁にまとめあげた〝白い花〟は既成作家には無い新しさが感じられ、その底に流れるモラルとともに注目される、と長井さんは言う。前川浩康さんは、東京都下、立川で貸本店を経営している同業者であり貸本全連理事前川淳氏（兵庫）の甥子さんでもある。

▲第一回三洋賞の結果が発表された「黒い影別冊」と入選作「白い花」（前川浩康）。

その他、近く出版予定の「いのちをかけろ」がある。古角元昭という二十一才の青年の原稿だ。長井さんはそのストーリィのうまさを激賞して、原稿を田中理事長に見せたが、拾い読みした田中理事長も長井さんの言葉にうなずいていた。

とにかく、これからはストーリィが重点となるでしょうと長井さんは前置きして、以下次のようなことを話された。

小説でもAクラスの小説が書けるような漫画作家でなければだめだ。

それから漫画家の専属の問題ですが、専属で一応その生活が保障されることによって、仕事の方が容易に流れるということは充分に考えられ、この点はよく注意しなければならない。うちでは画家に対しては厳しい、表紙なども何回でも描き直させる。

「アサヒ芸能」にいろいろ書かれたが、まるで無定見に出版しているように思われるのは心外だ。

頁はどうにでも出来る。要は内容の問題ではないだろうか。

製本も現在の糸かがりをさらに堅牢なものにしたい。

今度出た「忍者武芸帳・影丸5」は糸かがりで一五二頁だ。（文責在記者）

「全国貸本新聞」昭和35年10月

●検証・貸本時代の長井勝一

▲「忍者武芸帳」第七巻（1960年12月）より。このシーンの後、影丸は無風道人の手によって殺されてしまう。

マスコミの知らないベスト・セラー
—子供を相手に百万部稼ぐ—

貸本屋の危機救った"白土漫画"

紙芝居の絵かきで修業

キスも殺しも描き放題

▲「アサヒ芸能」昭和35年8月14日号より。当時、マンガに対するメディア側の認識は、所詮こんなものだった。

文中に出てくる「アサヒ芸能」の記事とは昭和35年8月14日号のことで、「マスコミの知らないベスト・セラー…子供を相手に百万部稼ぐ」という見出しで白土三平氏が3頁に渡って紹介されている。雑誌にとりあげられた記事としては最も早い時期のものと思われるが、これがどうにもひどい内容。「忍者武芸帳」に関する白土氏と長井勝一のやりとりとして書かれている文章の一部を抜粋すると、

「うんと、どぎつく行きましょう。なんの制約もなしに、描きたいことをやってみます。子供がよろこぶことなら、なんでもとり入れますよ。多少、残酷であっても……」

長井氏は大きくうなずいた。

「よし、わたしが責任を持つ。やりたい放題、暴れてくれ。何人殺そうと、どんなひどいシーンが出てきてもかまわん」

記事の筆者は、「忍者武芸帳」が貸本店で大人気なのは「キスも殺しも描き放題」な、内容のドギツさのためだと断定しているのだ。「全国貸本新聞」の長井勝一インタビュー掲載号の前号（S35年9月号）では、「アサヒ芸能」のこの記事に対する長井勝一のコメントが載っているが、白土氏はこの記事

◀「忍者武芸帳」第四巻（1960年6月）より。巻によっては、表紙には当初のタイトル「影丸伝」のみで「忍者武芸帳」の文字がないものもある。白土三平のこだわりが感じられる。

に大変傷ついたらしく、その後の「マスコミ嫌い」の定説もこの辺が原因となったのかも知れない。

さて、概ね順調だった三洋社だが、35年暮れ、長井さんの3度目の喀血で危機を迎える。その結果、昭和37年に解散するまでの約2年間は、岩崎稔と、大阪の貸本版元であるわかば書房から移ってきた松坂邦義（わかば書房ではスマートな短編誌「Z」などを作っていた）の若い二人の編集者が、本の制作から経理まですべてを任されることになった。

「忍者武芸帳」「鬼太郎夜話」、長井さんが入院する前後に出された佐藤まさあきの「黒い傷痕の男」などは順調に売れていたが、すでに貸本業界全体の先行きにかげりが見え始めていたのは事実だろう。それでも、長井さんが入院中に若い編集者によって企画された「ハイスピード」などは、3月号で米沢嘉博氏が書いているように現在でも高く評価されている。

その後、「忍者武芸帳」は「思想の科学」誌上で藤川治水、「日本文学」誌上で山口昌男などが取り上げ、一部の有識者などによって論じられるようになる。「歴史読本」63年9月号には「正史を描くマンガ家・白土三平」の見出しで、白土氏が見開きで取り上げられているが、ここでは白土作品を「いま流行りの〝残酷物語〟とはおもむきを異にしている」として、「残酷のための残酷」ではなく、「一コマ一コマにあらわれる残酷シーンは、その根底にしっかりとした史実をふまえているため、効果的でこそあれ、残酷シーンが浮きあがることがない。しかも残酷な目にあうのは、いつも権力者に反抗する庶民と決まっている」と鋭い。記事中には白土氏の英雄観が紹介されている。

「いわゆる英雄という人は歴史の発展法則にあったある瞬間をうまくつかみ、利用した人間にすぎないと思うんです。

影丸も、あの戦国乱世の世を戦いぬき歴史の頁をめくったその原動力である人々の姿を、仮に影丸という人物にしぼって現わしたつもりです。歴史というものは個人の力で動くものじゃありません」

先の「アサヒ芸能」とは大違いのしっかりした記事だが、文中の最後に『忍者武芸帳』に続く作品〝人間社会の発達の中の悲劇〟の構想はすでに成り」と書いてある。いうまでもなくこの構想とは「カムイ伝」のものだろう。

編集者として「忍者武芸帳」を担当し、三洋社解散後、赤目プロへ入った岩崎稔氏は、「COM」1969年5月号「戦後まんが主人公列伝」に文章を寄せている。当時を伝える貴重な資料だと思われるので全文収録する。

▲右は長井さんの作った「黒い影」、左は岩崎・松坂による「ハイスピード」。タイトルからして「影」の亜流の「黒い影」に比べ「ハイスピード」の垢抜けしたセンスの良さを見よ！

◀岩崎・松坂時代の『花詩集』では、デビュー間もない楳図かずおも作品を寄せていた。

●検証・貸本時代の長井勝一

忍者武芸帳

岩崎 稔

「漫画が小説を凌いだのか、小説が文字を不用にしたのか……」

　これは、かつてあるところで「忍者武芸帳」の広告に私が用いたキャッチ・フレーズの一部である。場所がら、いかにもことばがとうとつで、そこに飛躍もあるが、私がこの一文に盛ろうとしたのは、この作品が既存の「まんが」という一ジャンルのわくをこえるほどにも巨大であると同時に、その魅力が従来は他のジャンルのものであると信じられてきたものを、質量ともにこの作品が新たに奪いとったという意味である。が、いまここではそういった論評めいたことは、私のあずかるべきことではない。

　私のつとめは「影丸」の誕生にいあわせた一編集者の証言であるにちがいない。が、それとて、本来は長井氏（現・『ガロ』編集長）の役めなのである。

　白土三平によって「忍者武芸帳・影丸伝」（全十六巻・十七冊）が描かれたのは、昭和三十四年十一月より昭和三十七年九月までのほぼ三年間である。当時、まんが界では、「鉄腕アトム」（作者手塚治虫）、「赤胴鈴之助」（作者竹内つなよし）、「月光仮面」（原作川内康範）等が、読者の間に大きな人気を博し、やがて『週刊少年マガジン』『週刊少年サンデー』などが創刊されるなど、まんがブームといってよい時期であった。

　こうした背景のもとに、「忍者武芸帳」の第一巻が刊行され、「影丸」の誕生をみたわけであるが、実は、これを刊行した「三洋社」というのは、長井氏を含めて専従者二名の出版社であり、五回めより私が担当し、しかもこの「忍者武芸帳」第一巻の刊行をもって発足したものなのである。

　だが、貸本屋を通じて「影丸」の読者の前に姿を現わすと、たちまち、その荒々しい相貌と野望をたたえる鋭い眼光によって読者の心を奪った。「影丸」の見参するところ、いたるところに、かつて求め得なかったものを求めようとする熱気のようなものが舞い立った。

　貸本屋を介しての読者の間にばかりではない。まず編集者が熱狂的な一読者と化し、後続の原稿を待ち望むにいたる。写植屋から、出版社へ入稿するや否や、問い合わせがある。出稿をさいそくする電話がかさなる。写真製版所の従業員から出稿があれば予定を繰り上げてでも進行できる旨の交換条件がはいる。それもこれも、ことごとく「影丸」を望む声であり、発行に先だって生原稿で先を読みたいがためのものなのだ。従って、彼らの好意や便宜の約束も結果的にはしばしば逆に進行の渋滞につながるのであった。

　かくて、「影丸」は読者の間に圧倒的な人気を得たが、貸本界という限られたなかにあったゆえに、一般のまんがブーム、またその中での前掲作品、主人公のようには、多くの人々の血をわかさなかった。むしろ、その波には潜行的に、根強く読者の心腑深くに沈むといった受け入れられかたで、限られた人々から人々へと浸透していった。

　「影丸」によって生まれた出版社は、ひとつの目的のためにはすべてが手段である「影丸」によって、その使命が終わったとき、命を断たれた。貸本屋の店頭にあるはずの「忍者武芸帳」も、その後三年ほどの後には、すりきれ、あるいは破損して、ことごとく姿を消した。

　だが、それで「影丸」が死んだわけではなく、もちまえの不敵さと、反逆者の性格を貫いて、ふたたび世にでて、ブームを生むほどにも人を突き動かすのである。

元三洋社　編集部　岩崎稔

その後、テレビの普及などで貸本業界は行き詰まり、三洋社は結局解散。昭和37年、長井さんは青林堂を興す。第一弾として白土三平の「サスケ」を出版した他、今から見ると意外に見える作家の単行本を発行している。石森章太郎の「テレビ小僧」、赤塚不二夫「おそ松くん」、伊藤あきお「もん吉くん」、実写ドラマ化もされた吉田竜夫の「少年忍者部隊月光」、貝塚ひろし「ゼロ戦背番号3」、タレントもの（?）、峯たろう「九ちゃん」などの単行本は、現在の青林堂のラインナップから見ると異質な印象を受ける。「サスケ」を始め、大手商業誌の人気連載作品も多いが、当時はマンガを単行本にするという発想は大手にはあまりなく、新書判ブームによって「忍者武芸帳」などが単行本化されるのはまだ先のこと。

翌年9月には短編集「忍法秘話」を創刊する。白土三平を始め、水木しげる、諏訪栄、楠勝平など、その後の「ガロ」につながる作家陣が毎回短編を寄せた。余談になるが「忍法秘話」を含め、青林堂の初期単行本はほとんどA5判ハードカバーと豪華な作りだった。この頃の貸本がほとんどA5判並製だったことを考えると、かなり異色の造本と言える。これは貸本店以外の一般書店でも売ることを意図したためかどうか。94年、「ガロ」創刊。12月号から連載が始まった「カムイ伝」と、その後、続々と現れた新人達については改めてここで言うまでもないだろう。

文責・劇画史研究会

青林堂の初期単行本

▶「忍法秘話」第十巻（1964年8月）に掲載された「ガロ」の広告。「漫画の鬼」ですか…。

◀「忍法秘話」第十七巻（1965年4月）掲載の新人への呼びかけ。「ガロ」のものとは少し違うようだが、こちらも白土三平によるものだろうか。

マンガ原稿募集
新入の投稿を期待

一見はなやかにみえるが、名実ともにこのマンガ界を支えている作家は数少い。今日、マンガのレベルは、ごく一部の作家達によって、そうとう高いところまでおしあげられてはいるが、全体のレベルからいえばけっして、これでよいといえる段階には至っていない。多くのマンガはもっと独創的であってよいし、もっと技術的にもうまくなってよい。それになによりも、もっとお面白いマンガが数多く創まれて、読者を楽しませてくれるようだとなによりと思う。

一流雑誌に名が出るようになると、マンガ家も相当な収入が得られる既成作家はもちろんそれだけの面白さに溢れた作品を画くべく努めなければならないが、期待はむしろ新人に大きい。若々しい新人がぞくぞく誕生して、個々の独創性と、技術と、面白さを盛る工夫とで競い合ってくれたら、それがいちばんだ。マンガ界は、たちまちに素晴らしいものになるだろう。ふるって優れた作品をお寄せ下さるよう期待する。

応募規定

○未発表の自作品に限ります。内容、時代劇
○枚数は自由。
○原稿は黒一色でかき、原稿用紙の裏に住所氏名をかく。
○原稿の大きさは、タテ22センチ、ヨコ15センチ
○送る時は原稿を折れないように大きな封筒に入れ、第五種郵便として
○郵便局で重さをはかってもらって切手をはって出すこと
○送り先は、東京都千代田区神田神保町1の55、青林堂あて。

158

感謝の気持ちで一杯です

さいとう・たかを

我が青春の貸本時代、当時（昭和30～39年）私たち大阪出身の仲間が集まって、私たちの作品を〝劇画〟と呼ぶ運動を起こしていました。それは〝ストーリーまんが〟という、〝まんが〟の名称に間借りしたような呼び方に、まるで〝映画〟が〝活動写真〟という〝写真〟という名称に間借りしていた古さを感じたからです。

私は「今にきっと、我々の劇画は〝大衆小説〟にとって代わるんだ」という信念のもと、一生懸命でした。今思い出しても、熱いものがこみ上げてくるのを感じます。

その運動の最中、当時〝三洋社〟をやっておられた長井さんのお世話になりました。

長井さんには我々の運動を理解していただき、ずいぶんご協力いただきました。今ある劇画〝コミック〟界の隆盛は、長井さんたちのご理解があったからだ、と感謝の気持ちで一杯です。私もまだまだ現役でがんばりたいと思いますが、後輩たちも長井さんたちの作り上げたこの世界を、もっともっと豊かな世界に広げていってくれるものと信じています。長井さん、どうぞ安心して見守ってやって下さい。

――合掌――

長井勝一様の御霊(みたま)へ

平田弘史　五十九歳

1996.2月記

長井さんの御本によると、昭和34年頃、夜久勉、小出英男両氏と御三方で、奈良県天理市に住んでいた私の住居までお越し下された事が書かれていますが、その頃の事を私はサッパリ記憶に残していないのです。でも、妙にウロ覚え乍ら残っているのは、長井さんが菓子折片手に、ポプラ並木が連なる我家の前の道をポックラポックラ歩いて来られる長井さんお一人だけの姿なのです。これだけしか覚えていないのです。

その頃、天理教布教師の親を喜ばせる為に、私も信者となっており、かなりノメリ込んでいた訳で、訪れた誰にも、布教所らしい大きな三社の神棚に向って「拝んで下さい」と強要していたらしい事が、長井さんの御本に書かれてあったのを読んで、今更乍ら驚いている有様です。信仰もノメリ込むとどこか狂ってしまうのはコワイですねえ。

この時は原稿依頼に見えた様でしたが私はこの頃、日の丸文庫の社長より他社には執筆しないでくれと言うシガラミの中にあったので、長井さんとの話はハズマなかったようで、それで、記憶に残らないのだろうと思われます。後日、白土三平さんの助っ人原稿描きの依頼に、身体の具合が悪いからと答えたのも、日の丸との事があったからでしょう。私の健康は至って丈夫なものでしたから。その後、28歳で、原稿は描かん、と日の丸に伝え上京した私は、本当に劇画をやめる積もりでした。上京してから、白土さんとはどういう人か?と興味をもって白土家へ訪れました。そしたら下描き描いてみませんかの話となりましたが、少し描いて絵が合わない事が解り、ソレッキリとなりました。でも、この関係でガロに「愛」と「馬糞物語」の2作を発表する事になりましたが、ガロ編集部の人と語った記憶がありません。日の丸との関係が面倒なので絵は白土三平さん流にし、ペンネームも「加治一生」と変えて発表しました。

横道にそれますが加治一生のネームについて少し白状すれば、劇画家をやめようとして上京したキッカケは「加奥(かおく)」姓の女性と知り合い結婚を約して三ヶ月後に大阪と東京に離れて暮らす事になった私は、これからの人生、「加」と共に「治(おさ)」まり合って「一(いち)」から「生(うま)」れ変って生きて行こうと思っていたので「加治一生(かじいっせい)」となった訳でした。文通に明け暮れ恋心に涙した日々でもあったせいか「愛」などと題する作品を描いてしまった訳でした。

しかしやがて日の丸文庫の知るところとなり、またゾロ劇画を描く人間となった訳でした。50歳を過ぎてから劇画を好きにならねば神様に申し訳ないと思うようになりましたが、「薩摩義士伝」を中途で終了する頃には、劇画屋はもうイヤになって、電機屋の端くれみたいな事をして一年間苦しんだりしました。

ともあれ、長井さんを確かに覚えているのは石子順造さんの慰霊パーティでお顔を拝見した時だけです。長井さんは大勢の人に囲まれ談笑されておられたので入り込む隙もないまま、また、特にお話する話題もない私だったので、そのまゝ帰宅してしまいました。

それでも青林堂からは、その後「始末妻」を単行本化して頂いたりしています。その原稿料は大分過ぎてから頂戴しましたが、青林堂がそれ程苦しい出版社だと知っていれば戴かなかったかも知れません。でも時々仕事をしない私なので大いに助かったと思われます。加奥姓だった家内が実感してる事かも。

貴方が入院された事を知った時、天理教流の「おさづけ」と呼ぶ祈りを捧げに病院へ伺う積もりでしたが、〆切の都合で伺えなかった事が暫く気になったものでした。

ともあれ、不具合な御身体をいたわり乍ら御自分の信念を忠実に通ってこられた事に敬意を表すと共に、これからの、この世界をどうか御見守り御力添え下さいます様、お頼みして、この一文を閉じたいと存じます。

合掌

「愛」加治一生（＝平田弘史・「ガロ」1965年12月号）より

長井さんの飾らぬ魅力

つげ義春

最初にお会いしたのは、あれは貸本の…昭和33、4年頃だったと思いますね。34年の冬だったかも知れないです。「その頃は羽振りがよかった」なんてよく言われてますけど、長井さん自身よりも、三洋社の他の二人…小出さんと夜久さんがスポンサーだったみたいですね。だから勢いは良くて、前金で一万円、置いていったんですよね。いきなり前金を出すような出版社なんてなかったんで、こっちもビックリして、すぐに描こうということになった。三洋社でいくつか、時代物の短編を「忍風」に描いたりして、原稿は毎月のように持って行ってはいたんですけど、長井さんに会ったのは2、3回しかないんですね。話も…当時、僕は人とあんまり口をきかなかったから、お金さえもらえばパッと逃げちゃう感じで、長井さんと話をしたこともなかったんですよね。

当時の印象で覚えてるのは、長井さんもお金のある時は勢いがいいんですよ。で、夏に行ったらスイカ食べてるんですよ。足元に水を張ったバケツを置いて、片足突っ込んでるんですよね。冷房なんてない時代だから、ステテコ一つで腹巻かなんかして、うちわでバタバタあおぎながらあのしわがれ声で社員を怒鳴ったりしてね…（笑）。その姿が何かテキヤのような（笑）…感じだなあと思ってたんです。…でも、貸本の世界なんてどこでもそんなもので、夜久さんや小出さんは、バーやパチンコ店なんかも経営してましたから、マンガも水商売の一種みたいなセンスだったんじゃないかと思いますね。だから長井さんもそういうテキヤ的な雰囲気があったんだと思いますけど（笑）。

当時、僕は三洋社以外に若木書房という、やはり貸本向けの出版社で描いてたんですが、北村さんていうそこの社長も長井さんと親しかったそうで、北村さん、夜久さん、長井さんは「呑む・打つ・買う」の豪傑で「業界の三ワル」だなんて冗談を言ってましたね。「呑む・打つ・買う」は男の憧れでもあるから、いくらか誇張した自慢話でしょうけれど、長井さんのそういう面はすごく魅力的でしたよね。

82年、「「ガロ」編集長」出版記念パーティにて

先月号で永島慎二が、僕が長井さんをペテン師と評したと批判しているけど、とんでもない誤解ですね。あの記事の流れを読めば分かるとおり、僕は長井さんの清濁二面をもった巾の広さ、魅力に親近を寄せて語っているのにね。ずいぶん強引な曲解をするなア。

三洋社も初めは勢いがあったんですが、間もなく原稿料が滞るような状況になってきて、僕もいつのまにか描くのをやめてしまったんです。だからその後長井さんが結核で入院したことや三洋社の倒産も一切知らなかったんですね。

白土さんに初めて会ったのも三洋社の事務所だったんです。でも長井さんは紹介したりしないから、最初は誰だか分からなかったんですよ。挨拶もしなかったし。その時僕が持って行った原稿は「鬼面石」っていう作品だったんですけど、これは当時白土さんが売れていたので、絵柄をまねて描いたものなんです。それを長井さんは机の上に置いといたんです。その原稿を白土さんがパラパラと見てるんですよ。紹介もさ

れてないからお互いに知らん顔してたんですが、こっちは白土さんの絵をまねして描いてるから、内心恥ずかしくてね（笑）。

「忍風」は元々白土さんが中心だったんですが、白土さんも忙しくて、毎回短編を寄せたり表紙を描いたりするのは無理だったらしくて、僕がたまに表紙や扉を描いたりしてました。

三洋社の本が異色だったのは、「忍者武芸帳」の1巻もそうですが、他のものと比べてどれも分厚いんですよ。それは当時としては破格だったんですよね、価格はそのままで頁が多いというのは。だから何か新しいことをやろうというのは、常にあったんじゃないですかね。

＊　＊　＊

「ガロ」が創刊間もなくの頃、僕を探してるって、マンガ家の石川球太から教わって青林堂を訪ねたんですが、長井さんも三洋社の頃のようには景気がよくないみたいでちょっとがっかりしたんですけど（笑）。

僕が「ガロ」に描いてた期間は、実は短いんですよね。コンスタントに描いてた時期は2、3年でしょう。それ以後、青林堂とはずっと切れてしまっていて、事務所にいったりする機会もなかったし、「ガロ」に描いていた当時も、原稿は高野さんが取りに来たりしたことの方が多かったですから、長井さんとお会いすることもほとんどなくて。

「ガロ」が一時期、景気がよかった時に、長井さんが免許をとってパブリカを買ったんですよ。その頃に「白土さんが千葉の上総湊に住んでるから行ってみよう」って誘われて二人で行ったことはあるんです。でも、その時も話らしい話はしてないんですよ。着いてから、その日は白土さんが来客用に借りてあったアパートで長井さんと一泊したんですけど、僕も緊張してたし、食事してすぐに寝てしまって、一緒にいったのに話もしてない。

長井さんは飽くまでも白土さんを尊敬してたんですね。「ガロ」に描き始めてからも、原稿を見せると長井さんに必ず言われてたのは、内容よりも「白土さんのとこ行って勉強して来い」ってことを常に言われてましたね。でも、皆白土さんのところで勉強して白土調になったら、一冊の雑誌としてはかえってつまんないよね（笑）。

水木さんのアシスタントをやっていたのも、結局「ガロ」では食えなかったのもあるんですけれども、たまたま青林堂へ行ったときに「水木さんがアシスタント探してるんだけど、誰かいい人いないかねえ」なんて長井さんに相談受けたんですよ。だから水木さんが特に僕を、ってことじゃないんです。それで「じゃあ僕が行こう」ってことになって。その後に池上（遼一）くんがアシスタントになったんですね。

＊　＊　＊

長井さんに最後にお会いしたのは「『ガロ』編集長」の出版記念パーティが結局最後になってしまって、それ以後会ってなかったんです。僕が人付き合いが苦手で、そのわがままを押し通していたから、意外と長井さんとの交際もなかったですね。いつも閉じこもっているから情報も入ってこないし、最近長井さんが入院されていたことも全然知らなかったです。そんな具合に疎遠になってしまったのは、長井さんとしては、僕の貧乏を見て原稿描いてくれとは言いづらかったでしょうし、僕の方も高野さんが北冬書房を興して出した「夜行」に描くようになって、ちょっと長井さんに、後ろめたい気持ちも出来てしまったんですよね。それで余計長井さんに会いづらくなってしまって。でも結局「夜行」にも3、4本しか描いてなくて、両方に描ける力がなかったのが申し訳なかったですね。

＊　＊　＊

「ガロ」にこれだけ多くの作家達が集まったのは、それは全部長井さんの人柄のお蔭でしょうね。そういう意味じゃ本当に大した人でしたよね。生真面目だけが人徳じゃないわけで、さっき言ったテキヤっぽいような一面も魅力の一つではなかったかしら。「ガロ」を始めてからは貧乏ヒマなしだったようですけど、もうひと花咲かせて威勢のよい姿を見たかったですね。でもこれだけの業績を残せたことが、ひと花もふた花も咲かせたということかもしれませんね。

（談）

96年2月5日・調布にて

ああ、三洋社時代

元三洋社編集部　岩崎稔

神保町一丁目界隈の路上で、ときどきお会いすることがあった。エリカの店の角あたりでひょいと出会って、ひと言ふた言のかんたんな挨拶を交わしていた。

いつも変わらぬ飄々とした長井さんだったが、あるとき、見送っていた後ろ姿がふいに傾いて、足どりを乱されたことがあった。

健康のすぐれないことを知ったのは、三平さんの弟さんの通夜の席のことで、香田さんからうかがった。三平さん、奥さん、鉄二さんらのおられる席で、いつもは香田さんに寄り添っている人の姿が見えなかった。昨年の夏の初めのことだった。

訃報に接したのは新聞で、驚きもあったが、やはりという思いもあった。あのまま回復がかなわなかったのだろうかと、残念だった。

遺影の写真に、しばし瞑目した。

思えば、長井さんとの関係は、ずいぶん長いことになる。ぼくが三洋社に入社したとき以来ということになるから、およそ36年にもなるだろうか。

当時、長井さんは、設立してまもない三洋社の社長と編集長を兼務されていて、面接に出向くと、

「明日からでもいいよ」

そんなあっさりとした決まり方で入社し、あわただしく働くことになった。社員は、ぼくを含めて三人、みな若い者ばかりで、長井さんの下に、漫画の編集と出版の業務に従事するようになった。

三洋社は新興の出版社ながら「忍者武芸帳」（白土三平）「ハードボイルド」（佐藤まさあき）「忍風」「黒い影」（短編集）などを出し、漫画界の注目を集めていた。これらの書を毎月一巻ずつ巻を重ねていきたいというのが長井さんの計画であり、会社の方針でもあった。

長井さんは精力的に漫画家に会い、「鬼太郎夜話」（水木しげる）なども加え、会社の業績を順調に伸ばしていた。

漫画家から受け取った原稿は、社員に回し読みをすすめ、社員は待ち受けてむさぼり読んだ。漫画家を会社に迎えたときには、漫画談義に賑わい、とうとうとしてくりひろげられる爽やかな弁説に社員は耳を傾けた。

漫画家のこと、業界のこと、世間ばなし、どんな話題にも、長井さんはいつも雄弁だった。

その耳学問によって、ぼくら社員はたちまち漫画に関する半可通になった。漫画に親しみ、漫画家に親しむにつれて、会社の出版業務に誇りをもつようになり、仕事にも力が入った。おそらく長井さん流の社員教育だったのだろう。

貸本漫画の全盛とはやされる時代に、人気漫画を続々と刊行している会社の空気は明るく、長井さんも名編集長の名望を高めていたが、ときには眉間にしわを刻み、いつになく沈んだ顔を見せて外出先から戻ることがあった。

三洋社は、長井さんのほかに、小出英男（小出書房）、夜久勉（日本文芸社）の共同経営下にあった会社で、表向きは順風満帆に業績を伸ばしているかに見えたが、内実は少しずつ経営悪化の影がさしかけていたようだった。

売れゆきのよいシリーズにしぼって出版する工夫もされたが、思うような業績改善にはつながらず、長井さんのぐちを耳にすることも多くなった。

「もうからないねえ」

椅子に片膝を立てた独特のポーズで、眉間に縦じわをつくりながらつぶやく。

「忍者武芸帳」「ハードボイルド」「鬼太郎夜話」など、売れるものは堅実に売れていた。全国の貸本屋さんがもれなく一冊ずつ購入し、さらに貸し出しの回転をよくするために、二冊、三冊と買い増しするところがある計算なのである。それでもこれらの利益では、会社の経費をまかないきれない。

「売れるものがもう一、二点」

そういう思いで出すものが、かえって足を引っぱり、返品の山を高めていく。

貸本業界を対象にした出版物には、売れるといっても部数に頭打ちがあり、漫画出版社はどこも同じ悩みをかかえていた。

長井さんが倒れ、急に入院することになったのは、そんな時期だった。

香田さんの案内で小金井市の桜町病院に見舞うと、
「あとはたのむよ。なんとかなるよ」
　思ったよりは元気そうなようすなので、ひとまずは安心したが、今後の会社のことを思うと震えが止まらなかった。
　会社はまもなく、御徒町の小出書房に間借りをして移ったが、業務は従来どおり続けられ、しばらくしてまた元の東光ビルへ戻ってきた。
　しかし、長井さんは、まだ会社へ戻れるような状態にはならなかった。毎月、給料だけは病院に届けていた。
　社長は、小出さんから夜久さんに替っていた。
　長井さんが入院してからは、出版の業務は若い社員の手でおこなわれていた。長井さんの信用がものをいった。「忍者武芸帳」「ハードボイルド」「鬼太郎夜話」なども、着実に巻を重ねていた。
　業績の悪化をなんとかしてくい止め、失地回復をはかろうと真剣に考えていた。さまざまな対策を模索し、試行錯誤を重ねた。
「ハイスピード」は、そんななかで誕生した企画だった。創刊号には、さいとうたかをさんが協力してくれ、装丁までして応援してくれた。

三洋社より貸本向けに発行されていた「ハイスピード」「白狐」などは長井勝一が入院中に企画された。都会的なセンスで編集された「ハイスピード」などは貸本マンガファンの間で今でも評価が高い。

　テレビの普及につれて、貸本屋さんの灯がぽつぽつと消えていく。
　人気を得て読者を伸ばしている漫画でさえ部数を減らしていくといった奇妙にねじれた現象が生じていた。
　全盛と思っていた貸本漫画の世界は、とっくに峠をこえ、足ばやに衰退の道を辿っていくように思えた。
「『狼小僧』をやろう」
　三平さんが言ってくれた。ただし、条件があった。一般書店から直接に読者に購読されるような販路をとってもらいたいという。漫画家も出版社も追い込まれて圧迫されている閉塞した狭い世界に、壁を破って出口をきりひらこうとする提案だった。
　どのように模索してみても、結局は、活路はそこにしかなく、むしろ出版社自身がきりひらかなくてはならない問題である。
　ぼくは約束をして、原稿をもらって帰ってきた。
　二人の役員は協議を重ね、すでに一般販路をもっている有力者にも相談をして、販売会社とのあいだに新規の取引口座を設けようと奔走していた。
「狼小僧」は、ぼくにとって初めての上製本だった。一般書店の店頭に並ぶのにふさわしい、すばらしい体裁のように思えた。見本を手にする日をたのしみに、自分でも驚くほど胸をときめかせながら作業をすすめていた。
　この「狼小僧」は、しかし、書店の店頭に並ぶことはなかった。
　ぼくは三平さんの期待を裏切り、約束を破ってしまった。
　三洋社もまた社運を賭けて跳びこえなければならなかった千載一遇の好機を逃した。
「忍者武芸帳」はシリーズの終盤をむかえていたが、以後の巻は他社から出版されることになった。
　三平さんとともに勝浦の療養所へ見舞ったきりになっていた長井さんは、青林堂を興して「サスケ」を出しはじめた。
　三洋社は解散した。
　わずか三年の短命の出版社ではあったが、三洋社はぼくにとっていまもなお忘れることのできない会社である。22歳から25歳にかけての青春の時期に重なり、漫画を通じて多くの交友を得、人生上のさまざまな経験を積んだ時代である。
　後年、赤目プロに入り三平さんのお世話になったり、「ガロ」のお手伝いをしてつげさんの原稿取りをしたり、さらに後年、水木さんの「妖怪シリーズ」を編集させてもらったりしたのも、その機縁を辿れば、みな三洋社時代につながっている。
　長井さんは、その三洋社の名編集長であり、人生の恩師でもある。
　恩師が興し育てられた三洋社を、ぼくの手で潰してしまったことをほんとうに申し訳なく思います。
「すみません」
　この場をかりて、あらためてお詫びいたします。

ありがとう長井さん。

現代マンガ図書館・館長
全国貸本組合連合会・理事長　内記稔夫

青林堂の集会のご招待を頂き返事を出さなければと思っていた。何時もなら直ぐ出席の返事を出すところだが、なんとなく気が進まなかった。そうこうしている内に、朝日新聞紙上で、長井さんの訃報に接した。今回はどういうわけか躊躇していたのは虫の知らせだったのだろうか。

私と長井さんの出逢いは昭和三十年代の初め頃、長井さんの日本漫画社時代だったのだと思う。私が貸本屋「山吹文庫」を開業したのが昭和三十年、高校三年生の秋であるが、仕入先は御徒町のアメ横の反対側のガード下にあった特価本の卸問屋街で、最初は富士書房、その後は宏文堂がメインとなったが、並びに有った上野書籍、小出書房や足立文庫へも時々顔を出していた。

開業後二年目ぐらいだから昭和三十二年頃のことだ。常連客のなかにマンガを描いている少年が居て、専門家に原稿を見てもらいたいと頼まれ、貸本屋仲間から足立文庫でもマンガ出版をやっていることを聞いていたので、仕入れのついでに寄ってみたのだ。おそるおそる訪ね、店員さんに用件を告げると、快く取り次いでくれて二階から降りて来たのが例の人懐っこい笑顔の長井さんだった。早速持参の原稿を見せて批判を仰いだ。三十枚程の原稿に目を通しながら、どう見ても物になりそうもない（筆者の私観）原稿なのに、けなすことはせず、ここはもっとこうしたほうが良い、キャラクターの顔はもっと印象強く、などと適切で丁寧にやさしくアドバイスをしてくれた事が印象に残っている。私もマンガ家を目指したこともあり、仕事がら沢山のマンガにも接し、ある程度はマンガを見る目もあったつもりだったので、私の考えていたことと同じ答えが帰ってきたことに満足した。実はこれにかこつけてマンガ編集者に直接会って見たいという思いが強かったのである。そう言えば、足立文庫には日本漫画社のマンガが揃っていたように思う。その後、私の仕入先は神田村に移ったため御徒町の問屋街へは、徒二会館で月二回開かれていた市場へ行ったついでに顔を出す程度で疎遠になってしまった。

長井さんが三洋社を始めたころ（昭和三十五年）、新宿の東電サービスステーションで開かれた貸本組合の支部の総会にマンガ家と貸本業者の懇談会を目的に佐藤まさあき、辰巳ヨシヒロ、石川フミヤス、等のマンガ家をひきつれて来てくれた。この時は懇談会というよりサイン会になってしまったように記憶している。

長井さんが青林堂を興した頃、昭和三十八年に貸本組合「東京都読書普及商業組合」の事務所も青林堂と同じ神田神保町一－五十五に移転した。組合事務所の隣が町田文具店、この文房具屋に沿って左に曲がると「出雲そば」の通りで、畳屋の隣が航空ファン、その二階が青林堂、その先隣に私のメインの仕入先取次店の文苑堂が有った。組合員に対する配本を手伝っていたので、ほとんど毎日事務所に詰め、夕方からは車で配本に出掛けるという生活で、日に何度かは青林堂の前を行き来するのだから長井さんとすれちがいにお会いする機会も度々有った。「こんにちは」と挨拶、「やあ」と答えてくれる。「サスケ」が出されていた頃からだったろうか。

青林堂が水道橋近くの材木屋の二階に移ってからは、買い損ねた本や客注の本を買いに行く以外はお会いする機会が無くなったが、その後、手塚ファンクラブの連中が、手塚マンガの復刻版を出したいからということで、私所蔵の手塚治虫の原本を持って行った後、青林堂から「虫の標本箱」が出ることを知った。一セットは貰う約束だったが、他に数組欲しかったので予約に伺った。そのとき経緯を話すと長井さんは初めて知ったらしく「そうなの、貴方の本も有ったんですか」と意外そうな答えであった。多分この時までは長井さんから見れば、単なる出版屋と貸本屋の付き合いであったようだ。

その後昭和五十三年、私の「現代マンガ図書館」開館の際、マンガファンへも案内状を出したいからと、虫の標本箱予約者の名簿の借用をお願いしたら、快くコピーを下さった。また、マンガ図書館開館の挨拶状を各出版社に送付した際「マンガ関係の出版物を一部宛ご送付して頂きたい」旨の内容に答えて、当初から毎号送り続けて下さった数少ない出版社の一つが青林堂だったのである。

ありがとうございました長井さん、そしてさようなら。ご冥福をお祈りいたします。

映画から漫画へ

——長井勝一さんがやったこと

佐藤忠男

日本で映画会社が助監督を一般から公募するようになったのは一九三五～三六年頃からである。このとき応募資格を旧制高等専門学校卒業以上とした。例外はあったが、この頃からだいたい、映画監督になるには大学を出ていなければならないというふうになったのである。それ以前は映画界は殆ど縁故採用だったし、撮影所というところはやくざっぽい人間が多いところだと見られて高学歴の良家の子弟は親の反対が強くて容易に入ってこれなかった。逆にそこは低学歴だが芸術的表現の欲求にあふれているというタイプの青年たちの集りやすい場だったのである。そして公募制になる以前に撮影所に入って徒弟的な修業を重ねた低学歴の芸術青年たちの中からこそ、一九三〇年代から五〇年代に至る日本映画の黄金時代の頂点に立つ巨匠たちが輩出したのである。稲垣浩は小学校に行っていないし、溝口健二、新藤兼人は小学校しか出ていない。内田吐夢、市川崑は中学中退であり、成瀬己喜男は工手学校、小津安二郎、黒澤明、吉村公三郎、木下恵介は旧制中学卒業である。

さて、こうして撮影所が低学歴芸術青年たちの表現欲求を吸収する場だった時代が終り、高学歴でないと少なくとも助監督にはなれない時代になってから、低学歴芸術青年たちの表現意欲はどこに向けられるようになったのだろうか。一九四〇年代の終り、そしてとくに一九五〇年代からは、彼らにとっては漫画が映画に代るものになったと思う。

まず職業漫画家の極端な低年令化という現象が生じ、十代の人気漫画家が輩出した。漫画は進学しなくてもやれる表現分野となった。とはいえそれは漫画文化全体の幼稚化につながることとして憂えられた。しかしやがてそのなかから、高度な内容表現を磨きあげる者が出てくるようになる。映画と同じだ。

一九六〇年代、七〇年代に長井勝一さんがやったことは、この漫画表現に低学歴層の自己表現の集中的な爆発が起ったとき、そのなかから、たんに子どもっぽい表現だから子どもに受けて商売になるというのではない、低学歴芸術青年だからこそ表現できる内容を持った人々を選び出し、すでに映画では汲みあげることが難しくなっていた日本の社会の下層の真実の声に表現を与えることであった、と言えるだろう。それは現代の日本の文化史、芸術史の上で、真に有意義な行動のひとつだった。

長井さんはマンガ界の「精神的スポンサー」なんです。

——松本零士

長井さんとは、個人的にお会いする機会はなかったんです。ただ、「ガロ」という雑誌はマンガの発表の場をものすごく広げたし、それはすべて長井さんの感覚によるものだと思うんですよ。ですから長井さんの作られた「ガロ」というのは、マンガ界全体にとってはすごく大きな存在だったんです。一般商業誌の一方に「ガロ」のような雑誌があるお蔭で、マンガ界全体が活性化するという、これはすごく意味のあることなんですよ。

60年代当時は私も「COM」に「ガロ」と同時期に描いていたんですが、「COM」というのはどちらかというとオーソドックスな少年少女マンガというか、要するに児童マンガの世界の持続だったわけですよね。ただ、「COM」も「ガロ」もどちらも、新しい実験的な試みを受け入れるという点では共通していたんですね。今は残念ながら「COM」はなくなってしまって、ですから「ガロ」というのは本当に貴重な存在なんですよ。

「COM」と「ガロ」が同時に存在していた時期というのは、私自身も自分の世界がまだ完全に確立されていなかった時期で、回りを見ても色んな人が自分自身の世界を確立しつつあったんですよね。創世期というか、何か新しいことが始まるという時期で、描いていてもはりあいがありましたね。皆素晴らしい作品を毎号描いていて、緊張感があったし、楽しかったですね。マンガが好きで、新しいことをしようとしているマンガ家たちは非常に生きがいを感じていたと思います。それから「COM」「ガロ」共に、自分たちの個性というものを曲げずに済んだ雑誌だったんで、その点、特に「ガロ」はそうですよね(笑)。

一般誌だと、持続することが一番難しいんですよ。若い頃からやってても、その人自身の個性が確立するまでには時間が必要なんです。よほど才能のある人でもある程度時間がかかります。一般誌だとその時間を与えられないまま潰れていってしまう人が多いんですよ。「ガロ」はその時間を提供してくれたというか、それは長井さんの性格によるところも大きいんでしょうけれども、そういう意味では唯一と言っていいと思いますね。

マンガ家でも我々世代だと、デビューした頃は月刊誌主体でまだ時代がのんびりしていたから、個性が確立するまで待ってくれるような余裕があったんです。今の新人は、マンガ家志望者も昔よりずっと多いし、早さも要求されるでしょう。だから今だったら私だってどうなったか分からないですよ(笑)。マンガ家にそうした時間を与えるというのは、本当に損得抜きじゃないとできないことで、商業誌では絶対にできないんです。その中で「ガロ」というのは今でもそういうやり方を残していると言えますね。だからどうしても商業的には苦しいでしょうけれども、作家にとってはこれはありがたいことですよ。

ガロ系の作家がこれだけ出たというのは、やはり長井さんが理解者となって、個々の作家に、個性が醗酵して自分自身のスタイルとなるまでの時間を与えて下さったからだと思いますよ。そうして出てきた人は時間をかけて個性を完成させた分、その時間が作品を産み出す上での栄養分になりますから、作家としては強いんです。マンガ家の第一世代は今でも活躍してる人が多いでしょう。それも結局は時間をかけて自分のスタイルを完成させることができたからですよ。今は一般誌でもデビュー当時ものすごく売れていた人がほんの数年で潰されてしまうというのは良くあるでしょう。一般誌だと作品は商品ですから、売れなくなったら作家もお払い箱なんですよ。いくら一時的に人気が出ても、一生の仕事として考えたらこれは何にもならない。惨めな思いが残るだけですよ。

「ガロ」から出てきた人たちが、作風も、

小社刊「親不知讃歌」（現在品切）より

ご本人の性格もどこか温かい感じがするのは、それは長井さんに与えられた時間の中で、自由に自分の個性を伸ばすことができたからというのも大きいと思うんです。

　他から見たら、とんでもないというか、何だこれはというようなものでも「ガロ」には載せてもらえるでしょう。そういう作品が存在を許される場が、これだけ長い間保ち続けられているというのは本当に得難いことですよ。

　商業誌だと締切や頁数による創作上の制限というのもあるでしょう。作家が雑誌のサイクルに合わせられている状況があるわけです。そこからはみ出してしまう人は作家としてやって行けないんです。でもそこからはみ出る人というのが、マンガ界を革新するような作品を得てして産み出すものなんですよ。そこで「ガロ」のような雑誌が必要になってくるわけです。一般誌のような一つの方向だけではマンガ界なんて面白くも何ともないですよ。

　作家の個性なんて一年や二年で完成できるもんじゃないですよ。自分自身の個性として出てきたものが、五年、十年と描き続けていくうちに変質して、また別の形が完成されることもある。そのためには一にも二にも時間が必要なわけです。

　長井さんという人は、何よりも作家個人々々の一番の理解者だったと思うんです。もちろん、金銭的には苦しかったでしょうし、原稿料が払えないということもあったかも知れないですけれども、マンガ界にとって、精神的な一番のスポンサーですよ。原稿料を払うことはお金さえあれば誰でもできることですが、精神的なスポンサーというのは、実は一番難しくて、ありがたいことなんです。作家を理解してあげられる繊細さと、個性を引き伸ばすために充分な時間を与えるおおらかさを持った人なんて、他にちょっといないですよ。あれだけマンガの出版に力を注いで、一生を捧げた人というのはちょっといないし、しかも企業としてではなく、一個人としてやり遂げたんですから。

　私自身も青林堂から単行本を出していただいたことはあります。印税はもらってませんけど(笑)、それはそれでいいんです。作品が世に出る機会を作ってくれたんですから。ですから「ガロ」にしても常にそういう、作品を発表するための場として、これからもあり続けて欲しいですね。「ガロ」誌上で、「これは一体何だ!?」というような突拍子もない新人が出てくるのを見るのは、同じマンガを描くものとして一番の楽しみですから。

（談）

思い出すままに

高橋栄子

長井さんとの初対面は、一九六九年。それまでの職場の音楽雑誌編集部を飛び出して路頭に迷っていた私は、もう一つの愛読誌「ガロ」の扉をたたいた。

高校時代、遊びに行った友人の家でふと手にした「少年サンデー」に載っていた「カムイ外伝―下人」を目にしたのが、白土漫画との出会いだった。その衝撃が私を本屋に走らせ、ついに「ガロ」という雑誌の存在を突き止めた。それからは毎月発行日に買い求め、就職して金に余裕ができると、バックナンバーを注文した。白土三平以外の漫画もみな面白く読み、新しい世界が開けたような気分だった。

長井さんは最初、この人がほんとに社長なんだろうかと思ったくらい社長らしからぬ、もっと言えば、貧相な印象だった。

働かせてもらえないかと言う私に、長井さんは申し訳なさそうに「人手は欲しいけど赤字でねえ、給料が払えないんですよ」と言った。たった三人の小さな出版社の実態を目の当たりにして少し驚いていた私は、その言葉に納得した。

それから一週間ほどして電話が入った。

「たいした給料は払えないけど、来てくれますか?」

糊口をしのげればいいと思っていた私の側に異論はなく、次の日から青林堂の社員となった。

漫画に対して深い造詣も知識もない私は、言われたことしかできないお荷物社員であったに違いないのに、長井さんをはじめ香田さん、高野さんにずいぶん良くしてもらった。

長井さんは、暇があるといろいろな話をしてくれた。戦後の混乱期に漫画出版をはじめたこと、三平さんとの出会い、結核で助からないと言われながら絶対に漫画出版をやりたいからと手術に臨んだこと、病院を抜け出して飲み歩いた無頼振り、「ガロ」の売れ行きが良かったとき大手出版社に吸収されそうになったこと、そのとき三平さんも賛成してるからと言われても応じなかったのだが後で三平さんは反対してたと判明し互いの信頼関係が深まったこと、等々。

もしかしたら、この戦後二〇数年が長井さんの人生の核を成す時期だったのかもしれない。

長井さん個人のことなど何も知らなかった私には、小柄で温和な人柄からは想像もできない、英雄一代記のような波乱万丈の物語であり、感動的でもあった。

かと言ってそれらが自慢気に語られた訳ではなく、私に面白い話を聞かせようとして話してくれたのだ。

そんな時の長井さんは「チャースイでも飲むっぺ」などと言いながら、ストーブにのっているやかんを取り上げ、トポトポとみんなの分のお茶を入れてくれた。こんな暖かな雰囲気の職場は、後にも先にも青林堂だけである。

酒好きの長井さんだったが、下戸の私に酒を無理強いしたことはない。それまで、ちょっとだけでいいからとか、練習すれば飲めるとか言われて閉口していた私には、ほっと安心できることだったし、とてもスマートに思えた。

長井さんは、毎日持ち込まれる新人の原稿を丁寧に見て、言うべきことはきちっと言いながら、暖かみをもってアドバイスをしていた。そういうときの姿に、私はいつも圧倒される思いだった。

かと思うと、急に子供のような悪戯っぽい表情を見せたり、香田さんとのやりとりなどは、まるでティーンエイジャーのカップルみたいだったりした(それも何故か五〇年代のアメリカのティーンエイジャーなのだ。たぶんその頃の私は、怒ったガールフレンドを必死でなだめる男の姿なんて、アメリカ製のテレビドラマでしか見たことがなかったからだろう)。

反面、五〇歳前のその頃すでに、長井さんには好々爺の雰囲気があり、頑張ってる若者たちを応援しながらにこにこ見守っていくのが嬉しいんだというのが伝わってくるようだった。若い漫画家やファンの学生達との付き合いを心から楽しんでいたようだ。

その頃、青林堂によく出入りしてたのは、林静一さん、佐々木マキさん、勝又進さんなど。池上遼一さんや、つげ忠男さんもよく現れた。

「航空ファン」の二階に間借りしていた頃の青林堂入口。
左から高野慎三、高橋栄子、長井勝一、香田明子の各氏。

その人柄は漫画家やファンに慕われただけでなく、関連会社の人達からも好意と信頼を寄せられていた。

「お宅の社長、いい人だねえ」

「うん、いい人すぎて困っちゃうこともあるけど」

「あ、そーか。そういうのあるよな。病気の親父かかえこんじまったような」

「そう、そう。判るー？」

青林堂を辞めたいと思いつつなかなか言いだせずに悩んでいた頃、印刷所かどこかへ行ったときの会話である。相手が誰だったかもよく覚えていないのに、自分の気持ちをズバリと言われたこのときの言葉は印象に残っている。

今から考えれば、私の精神状態が不安定だった。朝起きるのが辛く迅速に一日を開始できなかった。遅刻が続き、その事実が負い目となってさらに自分を圧迫していた。

赤字は膨らみ続け、長井さんも頭をかかえる日が多くなっていた。

ある日、勧められて生命保険に入った長井さんは「自殺でも保険金がおりるんだ」などと穏やかならぬことを言っていたこともある。また「会社が倒産したら、債権者より先に社員が給料を取れるんだよ」とも。倒産したら他人に被害が及んでしまうということを真っ先に考えていたようだ。辛く悲しい話である。

でも、それから二〇年以上だった今も青林堂は健在である。長井さんを取り巻く人々が長井さんを倒産などという目に合わせなかった。やはり人徳のなせるわざだ。何の役に立った訳でもない私も、素直に嬉しい。

始めて扉を叩いてから三年後、私は青林堂を辞めた。しんどい経営状態だと判っていながら辞めるのは、見捨てるような気がして言いだしづらかった。

辞めてからも何度か遊びに行ったが、長井さんはいつでも歓迎してくれた。

いつの間にか足が遠のき、会長就任パーティで久々にお会いしたときは、ずいぶん年をとられて、私を覚えていないのではないかとの印象を受けた。香田たんは冗談めかして「もうボケてきているのよ」と言っていたが、後から聞けば、そのときすでに体は癌に蝕まれていたということだ。

その後手術を受け、持ち直したという話も聞いていたのだが……。

長井さんの業績については私が触れるまでもないが、自分の役割を果たし終えて逝った魂は安らかであると確信している。

「高橋さんも、俺の車に乗せてあげたかったなあ」

黒字だったときの社用車の話である。私も乗せてもらいたかった。**（元青林堂社員）**

玉石混淆の人

元 青林堂編集部 石黒清

僕が初めて青林堂を訪ねて長井さんとお会いしたのは高校一、二年の時だったからもう三十年も『昔』のことになった。

神田神保町にあった青林堂は、航空フアンと言う(小太りの小父さんが社長をしていて、いつも二人の女性事務員が出入りする人をチェックしてヒソヒソ噂し合っている)雑誌出版社の二階に間借りしていた。

狭い出入口で靴を脱いで、古い木造の階段を上ると小さなドアに『ガロ』と『サスケ』の表紙が貼ってあった。

その時の印象で二つの光景を今でも時々思い出す。

一つはその頃単行本やガロ誌上に水木しげる氏が頻繁に描いていた長井さんにそっくりな『本物の長井さん』が居られたこと、もう一つはその時、長髪の漫画家らしい人が向うを向いて椅子に腰掛けて長井さんと何か話していたのだが、その人の後ろ姿を目にした瞬間「つげ義春だ!」と思い込んでしまったこと(それは人違いでどや一平氏だった)。

田舎の町では一番のガロファンを自認していた僕は、とにかく青林堂さえ訪ねればそこで憧れの白土三平、水木しげる、つげ義春らの作家の誰彼に直接出会えるのではないかと勝手に思い込んで期待していた。

そして拙い自作の漫画の描きかけ原稿を持参していた。履歴書も持って行った。

「漫画家になりたいから原稿を見て下さい」「高校中退してすぐにでも青林堂で働かせて下さい」「白土先生の赤目プロのアシスタントにして貰えませんか」などとはその時は結局何も言い出せなかった(その日の原稿は後に調布でつげ義春氏に見て頂いたが氏をわずらわせただけだった)。

都内の姉の家に泊って、翌日か翌々日にまた青林堂を訪ねた。そして今度は思い切って働きたいと口走った。

その時長井さんは「学校やめてウチに来ても、この会社いつつぶれちゃうか知れないんだから、早まった行動しない方がいいよ」というようなことを、あの独特のカスレ声で短く言葉を継ぎながら言われた。

隣の机で心配そうにしていた女性からは「もしかしたらあなたが卒業する頃には青林堂でも給料出せる様になってるかも知れないから、頑張って高校だけは卒業してからもう一度よく考えて見て下さい」となだめられた。

それでも次の夏休みに二週間、倉庫整理のアルバイトをさせて貰えることになった。

その優しい婦人が、ずっとガロと長井さんを支え続けて来られた最良のパートナーの香田女史だった(その後、高校卒業の直前に僕は青林堂から香田さん手書の採用通知を受け取ることになった)。

青林堂で、仕事を通じて見る長井さんには余り家庭人の感じはなくて、所謂『普遍的な庶民』という感じの方だった。それが時として山本周五郎作品的であったり深沢七郎作品的であったりした。あの小柄な体躯で絶えず重い返本の山と格闘しておられたし、毎朝の出社も一番早かった。

練馬の赤目プロ迄歩いて十五分ばかりの下宿に暮らして居た僕が、寝坊して朝の九時半頃に「カムイ伝」の原稿取りに行くと、既に長井さん自ら電車乗り継ぎで一時間以上も離れた所をやって来て、先刻製版屋さんの方へ持って行かれたなどということも直々だった。

いつでも香田さんと二人で自転車操業の赤字と借金のやり繰り算段をしていた。その一方で楠勝平さんや滝田ゆうさん、つりたくにこさんや益三さん、林静一さんなどの生活費の心配を続ける人だった。

一九六〇年代の終りの頃、ささやかながら青林堂の本が売れ、作家達も次々にマスコミや映像メディアの注目を浴びて行く過程を、長井さんはクックッと笑いニコニコと喜びながら謙虚に応援して居られた。

時々、雑誌や大学新聞のインタビューなどが直接長井さんを取材に来ると、その記者たちは大抵その後段々と青林堂に出入りする様になり、いつの間にかガロに原稿を書く人になったり倉庫で返本の山に埋もれて在庫整理を手伝う人になったりするのだった。

つまりあの頃、青林堂やガロの周囲に集った人々の中には(僕自身や先輩の高野慎三氏のように)最初に白土三平、水木しげる、つげ義春と言った作家達の作品に興味や憧れを持って訪れ、そこで長井さんのパーソナリティに遭遇して、大袈裟に言えばその後の人生を決定づけたり変更し直したりする人が次から次へと現れるのだった。

一九六八年、僕は絵の専門学校へ通う為に一年間で青林堂を退社した。と言っても正社員ではなくなって週に二、三日仕事の日払いアルバイト生になったと言うだけのことで、相変わらず生活費の大半は長井さんや香田さんのお世話になりっ放しだった。

絵具代の足しにと変名で毎月ガロに小さなカットも描かせて貰っていた。

その頃の長井さんのガロ出版の姿勢には「三平氏と俺の本」という基本があって、僕は折に触れ長井さんご自身の口から「外れる訳に行かない仁義」のようなことを度々伺った。

それから数年の間、僕は特撮TV「ウルトラマンシリーズ」の美術スタッフで働いたり幾つかの漫画雑誌に読み切り作品を描いて暮らしたが、その頃には兄貴分だった高野氏も退社してガロは編集者も誌面もガラリと変貌を遂げて行った。

その後一九七四年の夏、僕は漫画では愈々食い詰めて東京を離れた。

それからは長井さんにも青林堂にもすっかりご無沙汰してしまって、一、二年に一度上京する用事が出来た時にしかお訪ねすることも出来ず、先年長井さんが引退されてからは一度もお目にかかる機会は無かった。

『ガロ』は僕にとって『玉石混淆の展覧会場』だった。時によっては玉の割合が多かったりある時期には駄石ばかりの羅列に見えたり、今思えばそれ自体他ならぬ玉石混淆の人生を歩まれた出版人、長井勝一氏の個性そのものの表出だったのだろう。

この頃では長井さんご自身の本の影響などもあってか、数々の武勇伝が流布されて何となく長井さんの人物像が十重二十重に膨らんで見聞されるようになった。

幅広い人脈の中には作家面したゴシップ屋なども紛れ込んで調子良く口に糊塗してもいるようだ。

しかし僕には三十年近く前、一緒に倉庫仕事を終えて銭湯で汗を洗い流しながら、或いは九段のソバ屋で、或いは田端ガード横のラーメン屋で息を継ぎつぎ「三平氏と出会って生まれ変わった俺」を語ってくれた等身大の長井さんの矜持の方が懐かしい。

ともあれこの三十数年の間に、ガロに関わった多くの人々がそれぞれに成功も失敗もして行った中で、最も初期のガロと青林堂の仕事に参加していながら、僕はずっとその本流を遙かに離れて一人草深い湿地にチロチロと命脈をつないで来ただけだった。なまじ我を張っただけの中途半端な月日を重ねて、気がつけば自分はあの頃の長井さんの同齢に達したというのに、長井さんにはついに不義理をしたままお別れすることになってしまった。

一九九六年二月、節会